

從天、誤作祆從天、故張有載侗輩、皆以祆祆妖妖合爲一字」といふたのは正しい考である。實際敦煌から出た唐代、もしくは之に近き時代の鈔本について此の字を求めて見ると、Stein 氏の得た唐光啓元年に寫した地志の殘卷中、伊吾縣の條に火祆廟、祆主祆神等の文字が見え、また Pelliot 氏の得た前記慧超の往五天竺國傳中にも、安國曹國史國石驪國米國康國等に行はれた宗教を記して、「此六國總事火祆」と書き、決して同傳箋證の本文に見える如く祆とは書いて無いのである。また沙州都督府圖經や、歸義軍節度使文書^⑦などにも、明に祆字を用ゐて居る。従つて版本の隋書通典以下の諸書に祆に作つてあるは、何時からか生じた誤を踏襲したに過ぎぬと考へる。元來祆字は天に従ひ、音は於喬の切なる *kiei* であつて妖と通じ、敦煌から出た切韻にも妖と共に宵韻中に收め、「亦作妖灾」と見える。それで祆とは全く音も異なる字であつて、兩者相通すべき理無く、たまたま之を相通せしむる佩文韻府^⑧の如きは紕繆に陥つたものに外ならぬ。

祆字の音については既に前にも通典や、希麟の音義や、說文新附に見ゆる所を引いたが、なほ廣韻には通典と同様に呼煙反と見え **Khien* であつたこと疑を容れない。然るに集韻には祆に作つて馨烟切 (**Khien*) とし、上記諸書に見ゆる所と同一音を與へた一方に、同じく祆字を「他年切」の音を與へた天 *tien* と同音中に收めてあり、司馬光の類編にも同様兩音が記されてある。それで祆には *Khien* と *tien* との兩音のあつたことを認めねばならぬ譯であるが、何故にかく兩音の存するかを見る前に、先づ此の字の構成を考へて見る要がある。既に前述の如く祆字の用ゐられることになつた以前には、支那では西域諸國の拜火教徒の天を祭ることを、天神に事へるといふてゐた、隋書西域傳にも、康國の條には祆祠の名を用ゐながら、高昌の條にはやはり天神の文字を用ゐてゐるのは舊來